

82 身心としてある人間の生

三月中旬以来多事であった。親戚の三十二歳の娘が末期の癌だったが、病状が予測よりも先を進んで、あれよあれよという間もなく四月に入ると亡くなった。あわただしく葬式の手伝いをする。その間、病態の推移を間近に知ったこともあって、人の死というものを考えさせられた。三年ぐらい前にもそういうことがあったけれども、今回は若い人の死だったから、わたしはいっそう深く動揺した。疲れのせいで鼻風邪になったが所用があって三日ほど遠出をしたら、風邪は本格的にひどくなった。四日間安静にして風邪には退散してもらえたが、こんどは、その薬のせいで胃が悪くなる。体重が減っていると知って少し余計に食べたのがいけなかった。ひどい逆流性食道炎になった。胃酸をおさえるのに一日間効く薬を毎食後服用するというとんまなことをしたこともあって、症状が治まるのに一週間以上かかった。歳はとりたくないものである。

結局四月は、必要に迫られたことをする以外には、わずかにニュースに注目するといったことができただけで、やろうと思っていたことはほとんどできなかった。この間、体力を保つために、多くの時間を上半身を斜めに安楽な姿勢で目を閉じて過ごし、思索の糸口になる対象をもたない頭は、おぼろげな想念をとりとめもなく巡らせた。

人の死を間近に観たことで、心はおのずと人の生とは何かと

いったことに向かう。だが、平凡な人間のたくわえは乏しいから、これまでに感銘させられた少数の言葉を引っ張り出してきて、それらを堂々巡りしてぼんやりと過ごしたというのが実態である。けれども、十分に歳をとったことを身をもって知ったのだから、これを機会に自分なりの心構えを整理しておくのは意味のないことではないはずだ。人に笑われることを書きとめるのもおかしいが、自分の死を見つめるときに、他人の目を気にしても仕方がないだろう。心覚えとして整理してみよう。

敬愛するモンテーニュは、「哲学をきわめるとは死ぬことを学ぶこと」だと言っている。もちろん、この言葉を世に流布する『葉隠』の狭い解釈と同列に並べてはいけない。『エッセー』は、人生についての豊かで深い思索の書である。死を見つめることは生について考えることなのだ。そして、デカルトに教えられて、生きながら考え、考えながら生きるのが人間の生である、とわたしは知る。

そういう人間存在を基礎づけようとしたデカルトは、キリスト教とギリシア以来の哲学が根づいていたヨーロッパに生きていたので、神や魂という理念を継承して、「生きながら考える」と「考えながら生きる」ことの両方を基礎とする哲学を組み立てた。ヨーロッパの近代哲学はそれを出発点にする。日本で人間を具体的に表現するとき「心身」と書くことが多いのは、その流れを受け継いでいるからだろうか。もっとも、中国では身心と書くのが普通のようなだから、心を優先する日本の

精神主義が心身という表記を選ばせているのかもしれない。

この点に関して、わたしはスピノザのとらえ方が優れていると思う。デカルトよりもあとの時代に生きたスピノザは、ユダヤのコミュニティから排除され、キリスト教徒からも異端者とされる汎神論に進み、「精神を身体の変容」ととらえた。時代を突き抜けたこの卓見は現代の科学的観点からも許容できる。だから、経験的実在論者であろうと思うわたしは、人間を「身体とそれが生み出す精神」ととらえ、「身心」と表記することを選ぶ。

デカルトのあと、ヨーロッパの思想は、啓蒙の時代を経る中でさまざまな思索に鍛えられた。他方、宗教や古来の哲学の外部で人知は進み、ガリレイとニュートンの力学が天と地の出来事を説明できる科学への扉を開いた。今や人間は、神を敬遠することを学び、根拠を挙げることのできない形而上学が真理だと断言できないことを知った。そういう近代への入り口にあつて、カントは、ニュートン力学をよく学び、進化論と呼べるほどの生物観をもっていた。そして、この世界を理解するために、第一原因や存在そのものを問うことをやめ、経験的に実在する世界のあり方を観察し、認識し、人間がどのように生きながら考えるべきかを考察した。カントが提出したのは、思索を構成的に着実に進めて整合的な世界把握へ向かう思考法である。それは、事物の探究のための方法を基礎づける仕事であった。

カントは、古い哲学の形而上的な部分を彼岸に置いて、自然

科学のように着実に対象の認識を前進させる方法を求めたのである。しかしカントは、考えながら生きる人間がどうあればよいかを考察することもやめず、理性的な認識の先に実践的な理性の働かせ方を問い、実践を統制するよき原理を置く必要を認めた。それは、人間の認識に秩序を与えるためにも必要なことだった。また、人間的な生き方を追求することにも意味を認め、「美」を尊ぶ人間の判断力を称揚した。

カント以後のヨーロッパで、多くの知者たちが、伝統の哲学的問題を受け継いで議論を展開した。ここでそれをもちだす力はないが、そこには、優れた知性の持ち主たちの人間と人間の事象についての重要な見解がある、と思う。だが、少ししか咀嚼できていないのが原因だろうけれども、わたしには、それらの哲学は伝統からくる形而上学的残滓を残しているように見える。それで、カントの指し示す方向に沿って“哲学する”とどうなるか、自分なりに考えてみた。あまりにも無鉄砲なことだったが、「いったい諸君は、およそ一切の人間に関係するような知識が、常識以上のものであったり、また哲学者によってのみ諸君のために発見されることを欲するだろうか」というカントの言葉に愚直に従ったのである。それほどわたしはカントに私淑している。

その思索は、『園丁と蝶の対話 認識と言語を巡って』十二章につづった。「認識」と「言語」をキーワードに、それに関係するさまざまなことを、目にとまった言説を対照しながら、

対話形式で考察したものである。それは、現代の自然科学の成果につなげることのできる、カントの認識論の唯物論的な解釈だろう、とわたしは思っている。

自分のしていることを観察してみれば、人間は、経験的に実在する外界と交渉し、自分の身心でそれを受けとめ、自他のありさまを認識して、その状況に対処する行動を起こす。つまり、認識を広く行動も含めてとらえれば、認識するとは生きることであり、生きることはそういう認識と行動を続けながら遂行される、と言いとることができる。ここで、認識の働きである思弁によって実在を証明するというような逆立ちをする必要はない。また、こういう人間の生をとらえるのに、認識作用に属する意識を異質な階層にある何かとして取り出したり、「世界の中に物理的性質に尽きない何か別のものがある」と断定したりするのは、根拠のない立論である。そういう思考法は、カントの切り開いた「認識論」をだいなしにしてしまう。

このことは、現代科学の達成した知識を認識論に組みこめば、いっそうはっきりする。人間は感覚器官によって外界と関係を結び、対象を諸表象の関係として構成的に受けとる。そうしてとらえた表象の関係を、神経回路網によって論理的に変換していった、対象を一つの意味ある関係として把握する。これが一つの認識の素過程である。そういう一次認識を総合した認識から行動が生じる。その行動もまた、神経回路網を通じて筋肉の運動にもたらされて生じるのである。この世界で、認識作用は、

自身を含めた経験的実在物と本質的にかかわっていて、意識が事物と無関係に存在するようなことはありえない。思弁が実在を証明できるというような論理はない。

一言で言えば、人間の生活は広い意味の認識・行動としてある。『園丁と蝶の対話 認識と言語を巡って』では、それを、生きることは認識することだと表現した。認識しながら生きるのでもある。このように考えれば、カントの『純粋理性批判』は、「生きながら考える」人間の生を全体的にとらえようとする方法論として現代にも有効だと思う。そしてカントは、『実践理性批判』と『判断力批判』で、「考えながら生きる」人間の生を高めようとしたのだと思う。

カント以後の知識の発展を考慮に入れれば、人間が言語を使う生物であることも認識論にとって重要である。人間は、表象の関係づけを言語によって為す、つまり、言語を使って思考する。身心としてある人間の思考は言語と不可分なのである。言語を使用する人間の認識は、神経回路網の論理回路によって遂行されて論理的なものとなる。こう考えれば、カントは、神経回路網で行なわれていることを、認識の論理形式として整理した、とすることさえできる。このことは、人間の言語使用能力が生得的なもので、脳に埋めこまれているとするチョムスキーの考えにつながっている。こうして、認識を考えるとときに言語の問題は切り離せない。神経回路網での言語の論理的演算が、人間がどのように認識するかにかかわっているのである。思考

の論理が自然の事物を関係づける論理に通じているのは、進化の途上で、認識とそれに基づく行動の気が遠くなるほどの試行によって、神経回路網の論理系が形成されたからだろう。

その言語は、生物種としての人間が社会生活を営む場で生成し、他者との交渉の手段でもある。さらに言語は、他者とだけではなく自己との対話ももたらす。そうして、言語の応酬は果てしない対話・世界の記述へと道を開く。それを、『論理哲学論考』で論理を探求したウィトゲンシュタインは、言語ゲームと呼んだ。人間の生で言語の果たしている役割は大きい。考えてみれば、人間にとって対人関係が最大の関心事である。人が悩むのはたいてい対人関係であることが、それを明らかにしている。この点からも、他者との交渉の手段である言語が、人間の条件として重要なことが判る。

結局、人間の生を知ろうとすれば、当然のことながら、いわゆる哲学の全体に関係する議論に至るのである。それは初めから判っていたことだが、堂々巡りのわたしの思索は、この経験的世界にあって人間の身心はどのように働いて生きているか、そこからさらに、どのように生きるのがよいかという出発点の問いに回帰する。

ところで、死生観に関係することから語り始めたので、この思索は宗教と無縁ではない。とても粗く学んだヨーロッパの思想を縦糸にしてわたしは人生観を整理してみたけれども、中国

では昔から、合理的な思想が尊重され、孔子は「鬼神を語らず」と言った。宗教に対するわたしの考え方は、「67 園丁と蝶の対話余録」に書きとめたように、「アートマンは存在するか」と尋ねられて答えなかったゴータマ・シッダールタの態度を採用するというものである。それは、自我を存在論的にとらえることなく世界を見つめて行動しようとする態度、だと思う。

現実の世界を超越せずに「自我」を見極めるとどうなるか、カントの考えをカッシーラーが次のようにまとめている。

自我の事実は、知覚と経験的思惟との媒介によって確証された他の事実に対して、いかなる優位をも特権をもたない。自我でさえも、われわれに対して単一の実体として根源的には与えられていない。自我の思想が我々に初めて生じるのは、それによって感覚内容が経験内容となり、「印象」が「対象」となるような総合、すなわち多様の合一の機能、に基づく。経験的自己意識は、経験的対象意識に時間的・事態的に先行しない。むしろ、客観化と規定との同一の過程において、われわれにとって経験の全体が、「内的なもの」と「外的なもの」、「自我」と「世界」の範囲へと分かれるのである。

それでは、宗教なしでよく生きるためにはどうしたらよいだろうか。お手本はやはりカントにある、とわたしは考える。だから、カントのことを一番長く書いてきたのである。「哲学を学ぶことはできない、哲学することを学ぶだけだ」と考えたカ

ントは、世界をどのように認識できるかを究明して、いわば哲学の方法を整理したあとは、もっぱら生き方の指針を議論した。だが、カントは完結した教説を提示したのではない。あの人の関心はしばしば現実にかかわる問題に向かった、とわたしは思う。（この言い方では、カントが必須と考えた「自由な諸人格性の世界」での普遍的道徳法則をはしょっている。以下につづる文章にも表立って出てこないけれども、そのような思考法も考慮されるべきだろう）。

日本の道元は、中国の盤山宝積禪師の「向上一路、千聖不伝」という言葉を引いて論じている。どんな聖人からも定まった至高の境地を教えられるのではない。むしろ、「千聖不伝」の境地へ到達することが目標である。「生きながら考え、考えながら生きる」人間の生き方は、どんな賢人からも伝授されえない。ただ、それぞれの人間が向上を求める路があるだけ、と考えるなければならないのだ。カントは、「哲学においてはいかなる古典的創始者も存在しない」という言い方をした。

そういう心構えで生活を律するために、わたしは古い素朴な言葉を標語にしている。毎日、殷の湯王の水盤に刻んであったという「まことに日に新たに、日々新たに、また日に新たなれ」という銘文を唱え、ゴータマ・シッダールタの「身体を感じ、観受を観察し、心を観察し、もろもろの事象を観察し、熱心に、よく気をつけて、念じていて」という身心の構えを保とうとしている。「身体を感じ、観受を観察し、……」という言葉は、

人間が身心からできていること、生きながら考え考えながら生きる存在であることをよく表現している、と思う。凡人は毎日しくじっているのだけれども、二つの言葉は、上で整理したわたしの人生観を確認しながら、日々に「向上一路」の路を歩むようにと勧めている。もう少し具体的な勧告を掲げるとすれば、わたしには、「われわれの務めは、自分の品性をつくることで、書物をつくることではない。戦争と諸地方をかちとることではなく、生き方に秩序と平静をかちとることである。われわれの光輝ある傑作は、立派に生きることである」というモンテーニュの言葉がある。

病中にぼんやりと考えたことをまとめようとしたら、これまで「蝶の雑記帳」に書いてきたことをくりかえすことになってしまった。実際は、衰弱した身心を巡った想念はもっと漠然としたものだった。ただ、「自己を灯として犀の角のように独り歩め」というゴータマ・シッダールタの呼びかけに和して、次のような一首を得ただけであった。

天運にゆだね正気を捧げもち一角犀のごとくに歩む

しかし、言うは易く行なうは難し。日々が本当に言うほどのものになっているか、覚悟は本物か、それが問題である。

2019年6月1日、麦秋至